Osaka University Knowledge Archive

Title	A historical study of Western music dissemination in Indonesia and in Japan through sixteenth-century missionary activity
Author(s)	Bramantyo, Pamudjo Santoso Triyono
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40120
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【9】

氏　　名	BRAMANTYO（ブラマンティヨ） PAMUDJO SANTOSO TRIYONO（トリヨノ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　12901　号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	A historical study of Western music dissemination in Indonesia and in Japan through sixteenth-century missionary activity **16世紀宣教活動によるインドネシアおよび日本における西洋音楽の普及に関する歴史的考察**
論文審査委員	（主査） 教授　山口　修 （副査） 教授　肥塚　隆　　助教授　永田　靖

論文内容の要旨

本論文は，アジアにおける西洋音楽受容の様態を大きく捉えるための布石として，論者の母国インドネシアと留学先の日本を事例にした比較研究という体裁をとる。さらに，この大きな問題をより鮮明に，また具体的に論じるために，キリスト教の宣教師たちが両国において16世紀に従事した宣教活動に着目して，教会音楽がふたつの国において受容され変貌を遂げるプロセスを比較することを論文の主要部分にあてる。あわせて，それぞれの国がもっと古い時代に外来の音楽をどのように受けとめていたか，また，逆に近年において西洋音楽をどのように受け入れてきたかを考察することによって，インドネシアと日本のいくつかの時代に展開した文化触変（acculturation）のあり方をも垣間みて，そこから一般論を組み立てつつ，インドネシアの音楽文化の未来の道を探ることを意図した論文である。

本論文の出発点は，インドネシアと日本に初めてヨーロッパ人がやってきた事件である。ポルトガル人たちは，インドネシアへは1512年に初めて香料の買い付けのためにやって来たが，彼らの乗っていたジャンクがアンボンの近くのバンダ海で沈没し，辛うじて地元の漁師に助けられた後，モルッカに上陸した。モルッカ住民のあたたかい歓迎があったにもかかわらず，ポルトガル人たちは当時の世界市場できわめて高い値がつけられていた香料貿易を独占するという当初の目的を中止しなかった。後には，軍国主義体制によって，彼らは植民者となった。そしてそれは1605年まで続いた。彼らは1543年に，意図せずして日本にも上陸することになった。数人のポルトガル人を乗せた中国のジャンクが南九州沖で台風に襲われたからである。ここでも彼らは地元の漁師に助けられ，種子島に上陸した。これらふたつの事件の後に，それぞれの国でキリスト教の伝道活動が展開され，教会音楽を中心とする西洋音楽の導入が始まったのである。ふたつの国での教会音楽の受け入れられ方には，類似した面もあれば，大きく異なる点もある。そこで，その異同と背景を検討するのが本論文の主な目的となる。

本論に入る前に，予備的な序論として「外国音楽に対するインドネシア人と日本人の態度 Attitudes of Indonesian and Japanese toward foreign music」という見出しの小文を載せている。これらふたつの国には，程度の差こそあれ，中国とインドという大文明の地から多数の楽器が渡来して，その後の楽器や音楽文化一般が形成される下地がつくられたという共通の地盤がある。そして16世紀には，たとえ偶然がもたらしたものではあるにしても，キリスト教音楽が流入してくる。さらに，近代には西洋音楽の大きなインパクトが両国に覆いかぶさってくる。こうした表面的には類似する外からの影響があったにもかかわらず，ふたつの国の音楽文化の形態は現代においては相当に異なるものとなっている。その違いが生じた原因はそれぞれの国民性にも求められようが，それよりも，それぞれ

の時代，それぞれの国での背景が異なることが論じられ，そうした社会的歴史的背景の考察が異文化音楽受容の問題解明に必要であることが主張される。

本論第一章「序章」は，16世紀のポルトガルの商人や宣教師たちがインドネシアと日本に初めて西洋文化をもたらしたなかでも，宗教，文化，政治，経済の四つの領域においてインパクトが大きかったことを述べ，本論文では宗教と文化にまたがったキリスト教音楽の影響に的をしぼることが表明される。

第二章「歴史的観点　Historical perspectives」では，ポルトガル人がやってくる以前および以後の両国の状況を歴史的に概略する。インドネシアにおいては，マジャパヒト帝国（1293～c 1520）のガジャマダ首相が統一に成功してはいたが，この強力なヒンドゥー教のジャワ帝国が衰退した後は，インドネシアに散在していた多くの王国を統合するほどの単一の強権は現れなかった。不幸なことに，外国の勢力がインドネシアの歴史に植民者として登場するのはこの時代からである。それはポルトガル人に始まり，オランダ人，イギリス人，日本人と続き，約4世紀にわたったのである。もちろん，ポルトガル人の存在や彼らがもたらしたキリスト教，そしてこれらすべての植民者たちに対する地元の反対勢力はいつでも存在していたが，外国勢の武器の整った軍隊には到底かなわなかった。

一方，日本に目を転じてみると，内戦的な戦国時代を経た後は，織田信長，豊臣秀吉，徳川家康の3人の支配者のもとでしっかりと統一された国であった。ポルトガル人が最初に日本にやって来たとき，彼らは貿易以外に何もできなかった。徳川幕府が島原の乱（1637～1638）を平定するのを助けたオランダ人だけが日本との接触を許された唯一のヨーロッパ的要素であり，それも商取引や自然科学などの分野のみに限られていた。

これらの事柄がインドネシアと日本の史的背景の主な違いであり，両国における西洋音楽の普及と受容，発展のあり方を間接的に特徴づけることになった。

第三章「16世紀インドネシアにおける西洋音楽の普及 Western music dissemination in sixteenth century Indonesia」と第四章「日本における西洋音楽普及の初期 Western music dissemination in early Japan」は，主にイエズス会の宣教師によってもたらされた16世紀インドネシアと日本におけるキリスト教化の影響について論じる。カトリックの宣教師たちは日本での布教に熱心で，当時キリスト教活動の中心地のひとつであった長崎においては「小ローマ」と呼ばれるほどにキリスト教化が広まった。当然，西洋音楽も16世紀の日本でかなり盛んにおこなわれていた。音楽教育を重要な科目としてカリキュラムに組み入れたカトリックの学校や神学校ができ，楽器や印刷機も布教活動を推進するうえで役立てるべく導入されていた。一方，インドネシアにおいては，1536年ポルトガルの船長アントニオ・ガルヴァオによって創立されたカトリック学校は，テルナテにあるのみだった。西洋音楽の楽器や印刷機に関する記述は史料には登場しないし，フランシスコ・ザビエルがモルッカ諸島での宣教活動のためにマレー語で書いたと伝えられる教義問答も残っていない。

それでも，16世紀における両国での西洋音楽普及をうかがわせる名残りがいくつか今日存在している。インドネシアのフロレス島では，聖金曜日の行列，クリスマス劇，仮面舞踊が今日もなお，変形してはいるがラテン語とポルトガル語の歌詞で演じられている。他方，日本の九州では，いくつかの隠れキリシタンの村があり，古いグレゴリオ聖歌が今でも歌われている。これらの歌詞は原典からはくずれてしまっているが，フロレスと九州の現象は16世紀の礼拝音楽が今日もなおアジアに存在することを証明するものである。

第五章「西洋音楽受容に関する両国間比較研究　A comparative study between two countries in their acceptance of Western music」では，グレゴリオ聖歌がモルッカ諸島と九州のきわめて広い範囲で歌われていた事実，そして，部分的にしろ400年以上も保存されてきたというフロレスと九州の事実に即して，より広い観点から比較検討がおこなわれる。まず，両国における西洋音楽の受容の初期段階の背景については，ひとつには，両国民がいずれもきわめて音楽好きであったことが言われている。音楽は宣教師たちの布教計画の主要な手段になっていたのである。しかし，イエズス会士たちはインドネシアよりも日本での布教に熱心であった。音楽教育は布教活動に含まれており，インドネシアよりも日本での方がより進歩していた。この後300年もの事実上の孤立期間を経て19世紀後半の明治維新の後，明治政府は幸運にも伝統音楽と西洋音楽をともに生活の大事な要素として扱うようになった。一方，インドネシアは，外国の列強につぎつぎと占領され，1945年の独立後も政治的，経済的困難にみまわれて，西洋音楽の発展に必要な理想をもつことができなかった。しかし幸いなことに，ガムランをはじめとする伝統的な民族音楽は長いあいだ栄えることができた。今日の日本において，西洋音楽が伝統音楽とならんで定着している背景には，経済

の繁栄も助けになっている。こうしてみると，インドネシアにおいて西洋音楽をもっと普及させるためにはまず経済を強化させなければならないとも考えられる。

第六章「一般論的結論 General conclusion」では，インドネシアが日本より早く西洋音楽と接触していたにもかかわらず，日本と同じような音楽的発展をみなかったという点を重視して，インドネシアの未来の可能性を探る試みをおこなっている。そのために，もし日本が200年間の鎖国をしなかった場合どうなっていただろうかということを仮説的に論じている。鎖国政策の是非はともかく，西洋の列強がインドネシアの場合とは違って日本を占領できなかったことが現在の日本の状況につながっていると論者は結論づける。そして，論者は次のような趣旨の文で論文をしめくくっている。「アジアの音楽研究者にとって今や西洋音楽を勉強するためにヨーロッパの国へ行く必要はないということに注目すべきである。日本には多くのプロの音楽家やレベルの高い音楽享受者たちがおり，運営面においても音楽的な水準においても国際的に質の高い音楽教育機関が数多く存在している。コンサートホールやテレビ番組も充実しているし，西洋音楽研究と民族音楽学のいずれにおいても，出版や学会活動などが盛んである。日本でのこうした大いなる発展の状況は，日本が他のアジアの諸国をリードするほどである。インドネシアは，日本の現状から多くの事柄を学ばなければならない。」

本文（英語）166頁（1頁＝約350語），合計概算約6万語
緒言，年表，要旨（英語，日本語，インドネシア語），概要（英語，日本語，インドネシア語），文献一覧，地図　計37頁

論文審査の結果の要旨

音楽について理論的あるいは歴史的に考察するというほどの意味では，「音楽学に準ずる」知的活動は，いずれの民族もいずれの時代においても存在してきた。しかし，近代的な「学」の体系としての音楽学は19世紀末にヨーロッパで始まり，その直後から日本にも導入され現在の発展につながっている。それは，幕末以後の日本近代における西洋音楽受容の歴史と軌を一にする日本での音楽学展開の足跡でもある。しかるに，本論文でも述べられているように，アジア諸国，とりわけインドネシアにおいては，西洋音楽の受容も西洋の音楽学の受容も日本に大きく遅れをとっている。西洋音楽の受容が日本ほどに徹底的に遂行されるべきか否かという問題については賛否両論，個々人によって意見が分かれるであろうが，近代的な音楽学がいわゆる「第三世界」に根付き発展するのが望ましいというのが現在の世界の音楽学では大方の見解とされている。

こうした現状からすれば，本論文は将来のインドネシア音楽学の展開に貢献する可能性を秘めた特長を備えている。第一に，自国の音楽史を自らの手で解明するうえでのひとつのモデルがここに提示されていることが指摘できる。すなわち，ポルトガル人のインドネシア到来そのものは一般に知られていることではあっても，そこにインドネシア音楽史上重要なキリスト教音楽の受容という側面が付随していたことは従来明瞭には述べられていなかった。伝統音楽の歴史を解明することとならんで，外国との音楽交流の歴史も一層明らかにされることが望まれる。

第二に，単に自国の音楽事情を解明するだけでなく，日本の事例と比較するという視点が貫かれている点で，本論文がインドネシアの学界に投げかける波紋は大きいであろうと予測される。幸運にも16世紀の両国で展開した西洋音楽受容は，同根のポルトガル人たちを媒介にしているという共通項がある。それを効果的に活用した比較文化論は，説得力に満ちている。

第三の特筆すべきポイントとしては，貴重な資（史）料を諸外国から収集するという作業を丹念に実施したことが挙げられる。いまや，「第三世界」の歴史的な資料は欧米にしか存在しないケースもままあるので，この種の資料収集とその学術的検証がさらに推進されるべき段階にあり，本研究はその意味でも意義深いものがある。

そのような長所は，英語を理解できるインドネシアや他のアジア人の読者にただちに訴えかけるだけの迫力で本論文を貫いている。しかし本論文には，近い将来に訂正されるべき誤りが多々見られるという欠点がある。また，一般歴史的な背景の叙述が必ずしも音楽の問題と有機的な関連をもつとは考えられない部分も見られる。もちろん，論者

自身やインドネシア人読者などにとっては，たとえば日本人がもっている日本史の常識が欠けがちであろうから，一般史の叙述がある程度はなされる必要もあろうが，主たる問題領域にさらに引き寄せた歴史解釈が今後望まれるところである。

もうひとつの短所としては，日本での西洋音楽受容という点では，幕末から明治，大正，昭和初期にかけて展開した局面が重視されていないことである。16世紀とは異なる時代背景のもとで進行した異文化受容を本論文の参照枠に組み込んでいたならば，さらに興味深い文化動態論が展開できたにちがいない。

しかし，こうした欠点は，本論文の全体的な価値を低下させるほどのものではない。インドネシアに帰国した後で，この路線での研究を続行させ，思考を深めることにより，さらに実り多い論文が将来次々と公表されるであろうことを期待させるものがあると判断できる。よって，本研究科委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。